埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Study of Picture Books Based on Mother Goose : An Accumulative Rhyme "The House that Jack Built" and its Pictures

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水間, 千恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/352

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

わらべうた絵本についての考察

── 積み上げうた「ジャックのたてた家」とその挿絵 ──

水　間　千　恵

はじめに

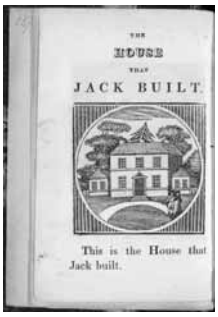
「ジャックのたてた家（The House that Jack Built）」は，マザー・グース（Mother Goose）と呼ばれる英語わらべうた（Nursery Rhyme）のひとつで，先行する詩行に次々と内容が加わって後になるほど連が長くなっていく形式の，いわゆる「積み上げうた（積み重ねうた）」の代表例として知られている。現時点で初出文献だとされているのは『トゥルー・ラブばあやの新年の贈り物』（*Nurse Truelove's New-Year's Gift,* 1755）であるが，起源はさらに古いとみなされており，18 世紀末から 19 世紀初頭にはチャップブックの人気素材になっていた（カーペンター＆プリチャード 336）。当時は，長短様々なバージョンが巷間に出回っていたが，J・O・ハリウェル（James Orchard Halliwell）が『イングランドのわらべうた』（*The Nursery Rhymes of England,* 1842）に採録したのは 11 連バージョンであり，オピー夫妻（Iona and Peter Opie）も『オックスフォードわらべうた事典』（*Oxford Dictionary of Nursery Rhymes,* 1951）でこれを踏襲した（Halliwell 161–63; Opie 229–31.）[(1)]。この 11 連バージョンの絵本として最も有名なのが，「現代絵本の父」（吉田 22）と評されるランドルフ・コールデコット（Randolph Caldecott）の『ジャックのたてた家』（*The House that Jack Built,* 1878）である[(2)]。これはコールデコットが初めて出版した子ども向け絵本 2 冊のうちのひとつであり，絵本史を考えるうえで避けては通れない重要な作品である。しかも，同時に発売された『ジョン・ギルピンのゆかいなお話』（*The Diverting History of John Gilpin,* 1878）の原詩がもともと子ども向けの作品ではないのに対して[(3)]，『ジャックのたてた家』の原詩はわらべうたであるため，コールデコット以前にもまた以後にも，これを素材にした子ども向けの出版物が数多く刊行されている。本稿が考察の対象としてコールデコット版をとりあげるのは，まさにこのような理由による。以下，コールデコット作品の「絵」を読み解くことを通じて，現代絵本の特徴の一端を明らかにしたうえで，様々な挿絵をつけて出版された詩「ジャックのたてた家」の日本での受容状況を確認し，児童文化財としてのわらべうた絵本について考えるための手がかりを得たいと考えている。

1. コールデコットの革新性

コールデコットの『ジャックのたてた家』は，すぐれた彫版師でプロデューサーでもあったエドマンド・エヴァンズ（Edmund Evans）からの依頼で製作され，1878 年のクリスマス前に売り出された。出版元のラウトリッジ（Routledge）社は，19 世紀半ばから絵を重視した木口木版多色刷りの冊子を精力的に刊行していた出版社である。「トイ・ブック（Toy Books）」と呼ばれたそれらの印刷物は，人口に膾炙したわらべうたや昔話に大判の絵を添えて 6〜8 ページにまとめたもので，6 ペニーあるいは 1 シリングで販売されていた。『ジャックのたてた家』の裏表紙の広告には，1 シリングシリーズ 79 点の書名が挙げられている。そのうち 8 点についてはウォルター・クレイン（Walter Crane）の名が付記されているが，コールデコットの新作 2 点については，画家名の特定にとどまらず「R・コールデコットの絵本（R. CALDECOTT'S PICTURE BOOKS）」という新たな項目が設けられている。ここに示されているのは，従来のトイ・ブックとは別カテゴリーとして新シリーズを展開するというラウトリッジ社の販売戦略である。実際，「R・コールデコットの絵本」はこの後 1885 年まで計 8 年にわたって，毎年クリスマス時期に 2 冊ずつ刊行されていくことになったのである。

新たに創刊したこのシリーズは，価格は従来のトイ・ブックと同じ 1 シリングだったが，内容は遥かに充実していた。『ジャックのたてた家』の場合，11 連の原詩に添えられた絵は 33 点，総ページ数も 30 ページに及んでいる。もちろんコールデコット版以前にも，「ジャックのたてた家」はしばしば挿絵つきで出版されていたが，初期の出版物では原詩の内容そのままに「家」「モルト」「ねずみ」「ねこ」「犬」「牝牛」など，各連のいわば「主要登場（人）物」の絵を添えるのがせいぜいであった。たとえば，図 1 は 1820 年代のチャップブックの表紙とその最初のページであるが，第 1 連に添えられた絵は単純そのもので，ストーリーを紡ぐという観点ではほとんど機能していないことがわかる[4]。これに対してコールデコットは，豊かな表情や躍動感溢れる動きによってキャラクターに個性を付与したことにとどまらず，テキストが明示していない背景を，みずから想像力を膨らませて描きこみ，さらにそれらの絵を有機的に連関させることによって，絵のみでテキストとは異なる独自の物語を展開したのである。まずはこの点を具体的に確認してみよう（図 2）。コールデコット版は表紙に，年配の紳士がドアを押さえながら女

表　紙



p. 2

図 1　*The House that Jack Built,* 1824.

図 2　R. Caldecott, *The House that Jack Built,* 1878.

表　紙

p. 1

p. 2

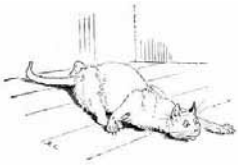
p. 3

p. 4

p. 5

p. 6

p. 7

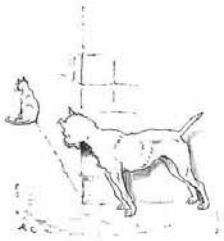


p. 8

p. 9

p. 10

p. 11



p. 12

p. 16

p. 17

p. 18

p. 19

p. 20

p. 22

p. 23

p. 24

性と2人の子どもを室内へ招いている場面を置くことで，「ジャック＝家の主」という設定を冒頭から読者に印象づけている。翻って図1を確認すると，表紙に描かれているのは特徴のない建物であり，しかもそれは，第1連に添えられた最初の挿絵とは明らかに異なっている。「家」の前には人影が描かれているが，あまりに小さく無個性であるため家との関係を想像することは難しい。ましてや「ジャックのたてた」というテキスト部分との関係など推測しようがない。もちろん両作品の出版年代には相当の隔たりがあるため，印刷技術の向上に伴う表現技法の変化は考慮すべきであろう。そこで同時代の出版物に収録された挿絵と見比べると，皮肉なことに，コールデコット作品の物語性の豊かさがいっそう浮き彫りになるのである。たとえば図3は，ラウトリッジ社がコールデコットの絵本を出版する前年に刊行した『マザーグースのわらべうた』（*Mother Goose's Nursery Rhymes,* 1877）に収録された挿絵である[(5)]。画面の中心を占めるのは第1連の主役たる「家」であり，その手前に後姿の人物が小さく描かれ，そばには建築道具や資材が並べられているものの，彼がはたして「家の主」なのかそれともただの「大工」なのかは判然としない。連ごとに1枚ずつ添えられたこれ以外の挿絵も含めて，ここでの絵の役割はまさに「登場（人）物紹介」にすぎないのである。そもそも，コールデコット版の登場人物たちが，その衣裳によって時代や階級をある程度特定できるのに対して，図1や図3では人物の造形を詳細に

p. 196

図3　*Mother Goose's Nursery Rhymes,* 1877.

把握することが不可能だというのも，大きな違いになっている。

コールデコット版の表紙をめくると，最初のページにあるのは表紙と同一人物だと思われる年配の紳士が，ベンチに座った女性２名と男性１名に対して，奥に見える建物を指し示している彩色絵である（1)。向かって左手に配した白髪の紳士を立位で描き，向かい合わせに腰かけた３名の男女を置くことで，コールデコットはこの場の主役を明らかにすると同時に，紳士の権力や権威を可視化している。さらに恰幅の良さ，右手をポケットに引っ掛けて立つ胸をそらした姿勢，口角のあがった表情などによって，誇り，自信，満足感など，紳士の内面をも表現している。また，紳士が指し示す建物の手前に，色鮮やかな花々が咲き誇り，犬たちがふざけあう庭園を描くことによって，表紙では全体像を明かしていなかった家の「格」を強調することにも成功している。その結果読者は，ジャックが立派なファームハウスの主であることを改めて認識させられる。しかも，主が客に対して自慢げに屋敷を紹介している場面のように見えるため，屋敷が新築されたばかりではないかという推測をも導くかもしれない。

続く第２ページには，表紙に採用された絵が詩の第１連とともに置かれている。第１ページと見開きを構成するこの絵が白黒であるうえに背景描写を極力排しているため，色鮮やかで様々な要素を盛り込んだ第１ページとの間に強弱関係が生まれている。帽子を脱いで開いた扉を押さえる紳士は画面の右端に配され，その姿や表情が，第１ページでの彼の姿と見事な対照をなしている。両ページにおいて紳士が相対しているのが人数上は同じ３名であっても，第１ページが大人３名であったのに対して，第２ページでは女性に手を引かれた子ども２名が含まれ，しかもうち１名は非常に幼い子どもである。コールデコットの筆は，この幼児の足元のおぼつかなさまで表現しきっており，紳士の視線をこの幼児に向けることで，やさしさや幼児に対する愛情など，内面を読者に感じさせることに成功している。さらに，これら２枚の絵を並べてみると，「表と裏」，「公と私」とでもいうべき対照性が備わっていることにも気づかされる。その結果，第２ページに描かれた女性と子どもは紳士の家族ではないか，といった想像を膨らませる読者がいてもおかしくはない。次の第３ページには，レンガに「JACK」の文字を掘っている人物が登場する。足場に乗り，ノミと鎚らしきものを手にした姿は，彼こそが家を文字通り建てた人物だろうと思わせると同時に，先の２ページでほのめかされていた「ジャックの家＝新築されたばかり」というイメージを補強する効果もあげている。しかも，コールデコットが巧みなのは，この人物を背後から描くことで，読者の視線を文字に誘導している点である。見る者は，後姿にとどめおかれた職人風の男性が脇役にすぎないことを，無意識のうちにも瞬時に認識させられるだろう。

原詩第１連の内容に対応している絵は以上の３点であるが，コールデコットは，同じように第２連以降も彩色絵１点と白黒のカット2〜3点を組み合わせる形で物語を進行させていく。彩色絵は全部で８点ありいずれも黒い枠で縁取られているため「絵画」としての趣が強いが，各々の

中心を占めているのが「家」「モルトとねずみ」「猫」「犬」「牝牛」「娘と男」「聖職者とにわとり」「農夫」であることに気づけば，コールデコット版ではこれらの彩色絵がとりもなおさず各連の「登場（人）物紹介」の役割を果たしていることがわかる。但しその紹介は，これまで確認してきた通り，チャップブックやわらべうた集の挿絵のそれよりもはるかに写実的で描写が細かく，テキストにない情報を読者に伝え，物語の奥行きを広げている。これらの彩色絵に白黒カットを絡めることで，その特徴はさらに増幅していくことになるのである。さらに注目すべきは，原詩が，彩色絵 8 点と見開きをなしている白黒カットページの余白部分のみに配されていることである。つまり，全 30 ページ中 22 ページでは，言葉が完全に省かれているのである。全体の 7 割以上を占めるこれらの「テキストがないページ」で読者が読むのは，「絵が語る物語」にほかならない。このような特徴について，20 世紀を代表する絵本作家モーリス・センダック（Maurice Sendak）は「言葉と絵とを対位法的に併置する天才的なやり方」(22) と評し，コールデコット作品を「現代絵本の幕開けを高らかに告げるもの」(22) と位置づけている。つまり，同じ原詩に絵をつけた出版物ではあっても，コールデコット版とそれ以前のチャップブックやわらべうた集とでは本質的な違いがあり，それこそがまさしく「絵本」と「挿絵つきの本」の違いなのである。

2. 読み手の想像力をかきたてる絵の力

コールデコット版の「絵が語る物語」について，さらにもう少しその特徴を確認しておこう。

第 4 ページに描かれているのは，モルトの入った大きな袋を担いで階段をのぼる老人の姿である。息を整えてでもいるのか口をすぼめたその表情にはユーモラスな雰囲気が漂うが，ページをめくると，読者の眼に最初に飛びこんでくるのは，彼の憤怒の形相である (5)。扉を開けてまさに部屋に入ろうとしている老人の視線の先には，宙を蹴って逃げるねずみの姿があり，そのねずみの後方には端が破れたモルトの袋が置かれている。この彩色絵から読者がまず感じるのは，苦労して上階へ運んだモルトをねずみに食い散らかされてしまった老人の強い憤りではないだろうか。だが，それに相対するページには，そんな強烈な感情はぐらかすかのように，とぼけた印象を放つ白黒カットが置かれている。コールデコットは，第 6 ページのふたつのカットのうち，まず詩行第 2 連に添えたカットで「ジャックの家に置かれたモルト」のみならず床の節穴から顔をのぞかせるねずみを小さく描くことによって，絵とテキストをリンクさせつつ物語に連続性を生む。その一方で，詩行第 3 連「モルトを食べたねずみ」に合わせた次のカットとして，ねずみがモルトを食べている場面ではなく，「モルト 4 升分（4 MEASURES OF MALT)」と記された紙を眺めているねずみの姿を描くことで，テキストと絵を乖離させて物語世界を広げているので

ある。とくに後者のカットは次ページの伏線にもなっており，ページをめくると，計量カップを思わせる伏せた容器のうえに2本足で立っているねずみが登場する（7）。鼻をうごめかせているようなその表情を，餌を探して嗅覚をとがらせている様子と捉えるか，おいしい餌を食べて満足しきった様子と捉えるかは意見のわかれるところかもしれない。だがいずれにしても，これらの絵が語っている物語が，表面的なストーリーだけでない何かを発していることがわかるだろう。立派な家の屋根裏で展開される寸劇にこめられているのは，明るいユーモアかもしれないし，皮肉な棘かもしれない。このような力，つまり読者の感情を喚起する力こそが，チャップブックの挿絵に欠けコールデコットの絵に見られる特徴なのである。

さらに，絵が表現している空間と時間の広がりにも注目しておきたい。第4〜5ページに描かれた階段や老人の動きは，モルトの置かれた部屋が建物の上階にあることを示しているが，続く第6ページ上段のカットを前頁の彩色絵とは逆方向から室内を捉えた構図にすることで，コールデコットは部屋の全体像も示している。しかもこのカットについては，モルトの袋が破れていないことから，第5ページのできごとに先立つ場面だと考えられる。このようなアングルの変化と時間の逆行の組み合わせは，第6連の内容を視覚化した第16〜18ページにもみられる。詩行に添えられているのは牝牛につかれて宙を舞う犬の姿を描いた白黒カット（17）であるが，この前後に犬に向かって突進する牝牛の姿を異なるアングルから捉えた2枚の絵が配されている。つまり，第18ページに描かれているのは第16ページと同じ瞬間であり，第17ページよりも先に起きた出来事ということになる。猫を壁際に追い詰めた場面（15）と見開きを構成しているページ（16）では弛緩しきった表情を浮べていた犬が，ページをめくると突然降りかかった災厄に驚愕している（17）。この落差は読者の笑いを誘うだろう。だが同時に，相対する彩色絵（18）のなかに描かれた一瞬前の犬の様子，つまり，突進する牛の巨体の行く手にちょこんとすわっているその無防備な後姿に，ある種の教訓を感じ取る者も少なくないはずである[(6)]。このように，コールデコットの絵は，時間的にも空間的にも対象を多角的に描き出すことで，物語自体の奥行きを広げているのである[(7)]。

ここまで確認してきた「絵が語る物語」の内容は，もちろん，読み手の解釈によって変化しうる。たとえば，ジョン・バンクストン（John Bankston）は，第1〜2ページに登場した紳士を家の所有者とみなすが，詩行に登場する「ジャック」についてはこの所有者ではなく，第3ページに登場する大工らしき後姿の人物だと考えている。壁面の文字が施行者としてのサインだというのがその理由である（バンクストン，47）[(8)]。他方，夏目康子は，最初に登場する紳士をジャックと考えたうえで，服の図柄や腰にぶら下げた鍵などを根拠に，最後の彩色絵の主役である農夫がこの紳士と同一人物，すなわちジャックであるという説を唱える（夏目159）。立派な屋敷を持つ自作農という設定にイギリス人の理想像を見出す夏目の見解は，「ジャック」という名が日

本の「太郎」や「一郎」に相当することを考え合わせればさらに説得力を持つかもしれない[9]。だが，ここで大切なのは「どの解釈が正しいか」ではなく，コールデコットの絵がこのように多様な読みを喚起するという点である。原詩以上に様々な解釈を誘発し，読者の想像力をかきたてるのがコールデコット絵本の特徴といえる。その絵を「読む」ことは，これまでの検証からもわかるとおり，読者の創造的行為にほかならない。つまり，コールデコットの絵本は，読者が参加して物語をつむぐ双方向的な創造の場として機能しているのである。絵とことばによって物語が紡がれる現代絵本というメディアの中でも，とくに芸術性の高い作品にみられる特徴といえよう。

さらに，コールデコット版『ジャックのたてた家』の場合は，この創造の場において絵の果たしている役割が非常に大きいこともあわせて指摘しておきたい。たとえば，第7連に初登場する乳搾りの娘は，哀れさや孤独な寂しさを示す“forlone”という語で形容されているが，原詩は，彼女がなぜそのような状態に陥っているのかをまったく説明していない。だがコールデコットは，犬に向かって突進する牝牛を描いた彩色絵（18）にあらかじめ乳搾りの娘を小さく登場させておき，犬の死骸の前で男が涙をこぼしながら穴を掘っている場面（19）ののちに，エプロンを顔に押し当てながら歩いている彼女の後姿を描いている（20）。この順番で絵を目にすれば，多くの読者は，最後の場面に描かれた娘の動作が涙を拭いているところだと推測することだろう。そして，その涙を犬の死と関連づけることになるはずである[10]。コールデコットは絵によってここまで物語を膨らませてから，読者にページをめくらせる。するとそこに“forlone”の語が登場するため（21），読者は，娘が「わびしく」「さびしく」「ひとりぼっち」の存在であることを言葉で再確認することになる。つまり，ここでは「テキストの語る物語」を絵が補足しているのではなく，「絵が語る物語」をテキストが補足するという仕掛けになっているのである。

そもそも背景となる物語を自ら創作し，それを視覚化して原詩と組み合わせたコールデコットの絵本は，それ自体が原詩に対するコールデコット自身の「解釈」であり，作品は少なくとも「翻案」と位置づけるべきなのかもしれない。この意味では，文学作品をもとにした映画が，原作とは別の独立した作品としての価値をもつのと同様に，コールデコットの絵本はわらべうたをもとにしてはいるが，原詩とは別の独立した価値をもつ作品だといえる。

3. 日本における「ジャックのたてた家」の絵本

わらべうたとしての「ジャックのたてた家」は，英語圏ではそもそも「子守歌」や「遊戯歌」のようにメロディをつけて歌われる類のものではなく，「暗誦うた（詩）」として楽しまれてきたものである。詩行が長くなっていくにつれて徐々にスピードをあげながら，リズミカルに一気呵成に読み通すのだが，うまくいけば読む者にも聞く者にも一種の爽快感をもたらす。言葉が平易

で，登場するのが身近なものばかりであるうえに，先に登場した詩行が反復されていくので，耳で聞いても内容がわかりやすい。そのわかりやすさは，ナンセンスものやことば遊びとは違って，詩自体に豊かな物語性が備わっていることにも起因する。つまり，構造上は「積み上げうた」，機能上は「暗誦うた」と呼ばれるが，内容的には「物語うた」と分類されるべき性質を備えているのである。ハリウェルが分類名として「積み上げ話（Accumulative Stories）」という語を用いていることもその証左となろう。このわらべうたがチャップブックの時代から広義での絵本の素材として積極的にとりあげられてきた理由の一端も，このような性質にあるとみてよい。では，日本ではどのように絵本化されてきたのだろうか。

マザー・グースと呼ばれる英語わらべうたの日本への初期の訳者としては竹久夢二や北原白秋が有名だが，彼らの作品に「ジャックのたてた家」は含まれていない。現時点で判明している初訳は大正 13（1924）年出版の『世界童謡集』に収録された水谷まさる訳である。「いたづら鼠」「うまそな小麦」「噛んで殺した小猫」（傍点筆者）というように適宜言葉を補い，モルトを「小麦」とするなど，わかりやすさに配慮したその訳文は子どもの読者への意識が明確で，戦後の出版物にも再録されているが[11]，「ジャックの建てたお家（うち）」といういかにも大正期児童文学らしいやさしげなタイトルをつけながらも，常体を用いたその文体はむしろ力強いものになっている。『世界童謡集』は，初山茂を筆頭に大正童画界を代表する画家たちの絵で彩られているが，「ジャックの建てたお家」のカットは昔ながらの「登場（人）物紹介」にすぎず，作品全体としても挿絵本の位置にとどまっている。

初期の翻訳のなかには洋書の挿絵を流用した作品もある。大正 14（1925）年に出版された『マザアグウス　子供の唄』である。訳者の松原至大は，「ジャックのお家（うち）」というタイトルにふさわしくやわらかな敬体を採用し「これはジャックが建てたお家です」と，読者に語りかけるような訳詩を作り上げている。とはいえ，物語調になったぶん，暗誦詩としての面白味が薄れている感は否めない。初期の翻訳例は，ほかに英文学者の竹友藻風が出版した読者対象の異なるわらべうた集 2 点にも見られる。そのうち『世界童話大系　第 17 巻（世界童謡集　上）』が子ども向けの作品であるのに対し，『Nursery Rhymes（英国童謡集）』は英語学習用教材であり読者の想定年齢は高い。だが両者に収録されている「ジャックの造った家」の訳文はほぼ同じである[12]。歯切れの良い常体を採用し，モルトに「麥麹」の漢字をあてて「もやし」のルビをふるなど，原詩を尊重した正確さに特徴のある訳文である。但し，同じ訳文であっても，前者に収録されたものは後者よりも改行が多く，各連に 1 枚ずつ挿絵も添えられているため印象は全く異なる。タイポグラフィーを含めた視覚情報の効果について考えさせられる事例である。

戦後間もない時期に刊行された『がてうのかあさん　マザーグース』に収録された「ジャックのたてたいへ」では，第 5 連以降については先行する詩行が少しずつ省略されているため，だん

だん長くなっていくのが特徴の「積み上げうた」らしさは薄れている[13]。とはいえ，この省略は必ずしもマイナスではない。内容理解の妨げになっていないうえに，たとえば「めうしの　ちちを／しぼった　をんなを／およめに　やったは／この　ばうさん　だ」（第10連）のように，後半になっても各連がコンパクトで快適なリズムを生んでいるため，むしろ読み聞かせには適した翻訳といえるだろう。この作品の挿絵も「登場（人）物紹介」型であるうえに，うち数点は洋書の挿絵をそのまま流用したものである。

暗誦うたとしての性格を活かすならば体言止めが有効な手段となる。その最初の例は1967年出版の子ども向け文学全集に収録された内野富夫訳かもしれないが[14]，「ジャックのつくった家」の部分に挿絵は添えられていない。同じ体言止めでもさらに音読しやすいのは谷川俊太郎が訳した「これはジャックのたてた　いえ」である。日本のわらべうたや舌もじりなどを手掛かりにマザー・グースを日本語に移植した谷川の訳文は，音の響きやリズムを最大限に尊重しており，まさに「口で唱え耳で聞く」にふさわしい仕上がりになっている。

谷川の『マザー・グースのうた』は，1975年から76年にかけて5巻本で出版され，たちまち大人気となり今なお増刷されているロングセラーである[15]。だが，人気の秘密は，訳詩の素晴らしさだけでなく，すべての詩に添えられた堀内誠一による白黒の鉛筆画に負うところも大きい（図4）。先に挙げた翻訳作品がいずれも「挿絵つきの本」であるのに対して，『マザー・グースのうた』は狭義の「絵本」として評価できる作品だといえる。堀内の絵がテキストの単なる添え物ではなく独自の物語世界を表現し，独創性あふれる谷川の訳詩と相乗効果を生んで，読者にさらに大きな想像の余地を提供しているからである。ここで堀内は，1連ごとに1カット添えるという形式，つまり「登場（人）物紹介」の体裁をとりつつ，第1連に登場する「家」を「ジャックのモルト（JACK'S MALT）」という看板を掲げたレンガ造りの倉庫あるいは店舗を思わせる立派な建物として描き，建物の前には丸々と太った紳士と膨らんだモルトの袋を配している。こうすることで，わずか13字のテキストに豊かな背景を与えているのである。モルトで財を成したらしい紳士の「家」と見開きを成すページには詩行2連，3連，4連が並ぶが，その下に描かれた「モルト」「ねずみ」「ねこ」をよく見れば，袋の穴からこぼれたモルトの山にねずみが手を

pp. 50–51　　pp. 48–49　　pp. 46–47

図4　谷川訳・堀内絵『マザーグースのうた』（1975）

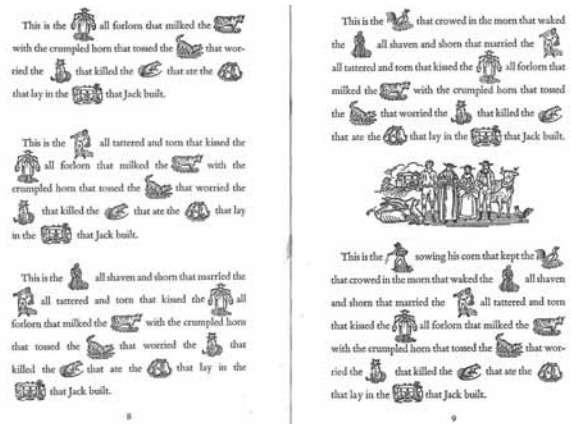
かけ，そのねずみのしっぽを猫がふんづけているというように，テキストと共鳴する連続性が付与されていることがわかる。また，第5連の主役である犬には，ボクサーやブルドッグを思わせるような不敵な面構えと湾曲した短い脚を与えているが，その個性は，“worried the cat”という一節を「ねこを／いじめた」とした谷川の訳詩の独創性と響きあう。さらに，第6連のきりりとした目元が印象的な美人牛を見れば，角で犬を突くという乱暴な行為も，「ねこを／いじめたいぬ」に対する正義の女神の鉄槌であるかのように思えてくる。

堀内の絵のなかでもひときわ独創的なのは，第7連の「めうしのちちをしぼった／ひとりぼっちの　むすめ」と第8連の「むすめにキスした／ぼろをまとった　おとこ」である。多くの画家たちが，娘の表情に悲しみや憂いを描いているなかで，堀内の絵から伝わるのは不安や怯えである。娘の視線は背後に向けられており，天秤桶の揺れや足の角度は，彼女が走っているのではないかと想像させるような動きを示している。そして彼女の視線の先に描かれているのが，変質者を思わせるような表情を浮かべた男の姿なのである。従来，この第8連と続く第9連は幸福なイメージで捉えるのが一般的であった。たとえばコールデコット版でも，憂鬱そうな表情を浮かべていた娘（22）は，最終的にぼろ服の男と仲睦まじく肩を寄せ合って家路をたどっている（24）。原詩には男の結婚相手が明示されていないにもかかわらず，多くの画家が第7連の主役と第8連の主役を第9連で結婚させるという形で視覚化しているのも，このような解釈の延長だと考えられる。しかし，堀内が描いたような怯える娘と不気味な男にハッピーエンドはありえない[16]。実際，第9連に幸福な男女が姿を見せることはなく，主役の聖職者も，驚くべきことに後姿で登場する。だが，他に例を見ないこのユニークな構図は，古めかしい衣装のシルエットを示して聖職者の権威を感じさせる一方で，毛のない頭部を焦点化しているため「つるつるあたまの　ぼうさん」という訳詩に共鳴して，その滑稽さを際立たせる効果もあげている。続く第10連の構図も独創的である。雄鶏はベッド枠につかまって時を作り，聖職者は布団のなかからそれを迷惑そうに見上げている。寝ぼけ眼の聖職者の姿は，太陽の照りつけるなかで種まきをしている第11連の主役と好対照をなし，農夫の健全さがいやでも浮かび上がってくる。モルト御殿の前に立つ紳士で始まり，広々とした畑で汗を流す農夫の姿で締めくくられるこの「物語」は，勤勉に生きる人間への賛歌なのかもしれない。こうしてみてくると，堀内の絵は，1連につき1点ずつ添えられた「登場（人）物紹介」のタブローのようでありながら，実は，相互に連携して独自の物語を紡いでいることがわかる。しかもそれは，谷川の訳詩に寄り添ったり離反したりしながら，読者の想像力を喚起しているのである。

モーリス・センダックによれば，マザー・グースに絵をつける方法は二つしかないという。一つは「直接的でナンセンスでないアプローチ ── そこに出てくる事実をわかりやすい現実的なイメージとして提供するやり方」（15）であり，もう一つは絵によって歌の「あらゆる陰翳やニュ

アンスを高め，より大きな意味を与える」(17) やり方である。センダックはコールデコットを後者の最良の例として称賛しているが，堀内誠一も間違いなく後者のアプローチでマザー・グースと向き合った画家である。そのように物語性豊かな堀内の絵と谷川の訳文を組み合わせた翻訳書は，70 年代後半の日本に一大マザー・グース・ブームをまきおこした。英語学習用の注釈本という形ではあったが，オピー夫妻のペーパーバック版『わらべうたの本』(*The Puffin Book of Nursery Rhymes,* 1963) の一部が，『*The Book of Nursery Rhymes*（ナースリィ・ライム・ブック)』というタイトルで日本へ紹介されたのはこの時期のことである。原著は夫妻がわざわざ子どもの読者のために編んだもので，〈ナルニア国〉シリーズの画家として有名なポーリン・ベインズ（Pauline Baynes）の古風で温かみのある挿絵の魅力もあって，長らくイギリスの子ども部屋を席巻した名著である。なかでも ここに収録されている “The House that Jack Built” は，各連の「主要登場（人）物」部分に絵をあてはめた，いわば「判じもの」スタイルで表現されていて独特の面白さがある（図 5)。

岸田理生の訳詩にケート・グリーナウェイ（Kate Greenaway）の絵をちりばめた『マザーグースの絵本』(全 3 巻）も個性的な作品である（図 6)。第 3 巻に収録された「これはジャックが建てた家よ」の部分にグリーナウェイの挿絵はないものの，文末に終助詞「よ」を付した女性的な訳詩は，明らかにグリーナウェイの作品イメージを意識した文体である。また第 2 連以降では「これはジャックが建てた／家のなかにあったもやしよ」(傍点筆者）というように，先行する連の「主要登場（人）物」を文頭に持ってくることで，各連をまとまりのあった一文にすると同時にその連の主役にスポットライトを当てている点にも工夫が見られる。最も興味深いのは，第 11 連の後に「わたし，今，とてもたいくつしているので，もう少しつづけてみます」(123) と



pp. 8–9

図 5　オピー夫妻編『The Book of Nursery Rhymes（ナースリィ・ライム・ブック)』(1978)

表紙

図 6　岸田訳『マザー・グースの絵本Ⅲ』(1976)

pp. 48–49

図 7　寺山訳『マザー・グース』(1984)

述べて，「お百姓さんをおどろかせたいたずらっ子のアンよ」「いたずらっこのアンを怒った／アンのママよ」を加えた 2 連を提示し「あとはみなさんにおまかせします（中略）長く長くつづけてください」(125) と読者の参加を呼び掛けている点である。

岸田の師にあたる寺山修司も「これはジャックの建てた家」のタイトルで訳している。寺山は，弟子とは対照的に各連の主役を詩行の最初ではなく最後に揃えてみせた。「これはジャックの建てた家／でつくったこうじ／を食べたねずみ／を殺した猫」（傍点筆者）というように助詞が詩行の頭に置かれるその文体は，岸田訳より暗誦に適している。また，岸田訳が各連の主役のみにスポットライトを当てていたのに対して，寺山訳では先行する連の「主役」たちにも等しく読者の注意を惹きつけている。問題は，詩行が積み上がっていくにつれて増える「主役」たちに対して，絵が新たな登場人物のみを提示するため，のちの連へ進むほどテキストと絵の不均衡が目立つ点である。寺山版『マザー・グース』を彩っているのは，エドワード朝イギリスの子ども部屋で人気を博した妖精画の名手アーサー・ラッカム（Arthur Rackham）の挿絵である（図 7)。繊細な線で洗練された雰囲気を醸し出すラッカムの絵は，そもそも 1913 年にイギリスで出版されたわらべうた集のために描き下ろされたもので，それ自体は大変魅力的ではあるものの，寺山による訳詩との相関性は希薄である。グリーナウェイの絵に対する意識が明確だった岸田とは異なり，寺山にとってラッカムの絵は単なる添え物だったようである。

おわりに ── まとめと今後の課題

以上，英語わらべうた「ジャックのたてた家」をもとにした様々な絵本について確認してきた。コールデコット版の分析からわかったのは，近代絵本の成立要件とは，テキストの添え物ではなくテキストと互角に物語を紡ぐ力を持つ絵の存在だということである。そのような絵の力は，形態に左右されるものではない。テキストに添えられた小さな挿絵（カット）のように見えても，独自の物語を紡ぎだす絵があることは，谷川 & 堀内版で確認した通りである。「ジャックのたて

た家」のようにテキストが先に存在する場合，テキストだけでは表現しえない物語世界をいかに提示できるかという点で，画家の力量が問われることになる。コールデコットや堀内は，テキストの背後にある物語を自らの想像力で補って表現することで原詩に新たな価値を付与しているのである。彼らの絵本に共通するのは，それを読めば，原詩をよく知る者ですら新たな物語世界を経験し，新たな感動を得られるという特長である。この意味で，彼らの絵本は原詩とは異なる価値を持つ独立した作品だといえる。逆に言えば，先行するテキスト（原詩）以上のものを提示しえない絵本に，そもそも存在意義があるのかと問う必要があるのかもしれない。今回は紙幅の都合上論じることがかなわなかったが，「ジャックのたてた家」をもとにした絵本については，20世紀以降も数多く出版されており，中にはコールデコットや堀内とはまったく異なるアプローチで独自の物語世界を表現した画家の作品もある。これらの分析については，他日を期すこととしたい。

また，わらべうた「ジャックのたてた家」をもとにした広義での「絵本」の日本における受容史を紐解くなかで確認できたのは，絵本におけるテキストの重要性であった。同じわらべうたをもとにしていても，文体，ことばの選択，語順，区切り場所などによって，テキストの作り上げるイメージは全く異なる。さらに，どれだけの名訳ができようとも，「絵本」としての完成度は，絵と組み合わせたうえで評価されるべきものであることも改めて確認できた。つまり，広義・狭義にかかわらず，翻訳絵本の名作は，絵に対する敬意と理解を欠いた翻訳者や編集者には決して生み出しえないものなのである。

そもそも「口で唱え耳で聞く」わらべうたは，子どもたちの想像力や創造力を磨き，豊かな言語能力を育む文化財として継承されてきたものである。「ジャックのたてた家」を例にとれば，子どもたちはその暗誦を通して，言葉のリズムや響きに慣れ親しみ，詩の背景を想像したり，その続きを自ら創造したりして楽しんできた。これに対して「目で見る」要素が加わった「絵本」というメディアは，「口で唱え耳で聞く」だけでは得られない新たな価値を提供できるならばよいが，そうでなければ，わらべうたが本来持っていたこのような力を削ぐばかりとなってしまうのではないか。とくに近年，日本では，幼児教育界で絵本の読み聞かせが強く推奨されることと連動して，詩やわらべうたをもとにした絵本が次々と出版されている。このことの是非や，絵本というメディアの特質を生かした活用法については改めて議論すべきではないだろうか。この点については今後の検討課題としたい。

《注》

（1） オピー夫妻は，*The Oxford Nursery Rhyme Book*（1955）には，農夫の所有する馬と猟犬と角笛が登場する12連目の加わったバージョンを収録している。各連に古いチャップブックから集めた挿絵を1枚ずつ添えているのも，事典との違いである。ちなみに，古いチャップブックの中には，第10

連ののちに「キツネ」「犬を連れてラッパを持ったジャック」「馬」などを加えた16連バージョンを収録したものもある（*The History of the House that Jack Built: A Diverting Story,* London: John Harris, 1800）。

（2） 但し，第11連の “This is the farmer sowing his corn/That kept the cock crowed in the morn” の下線部分は，コールデコット版では “who sowed the corn” “fed” にそれぞれ変更されている。

（3） William Cowperの原詩は，1782年に *Public Advertiser* 紙に掲載され，詩集 *The Task*（1785）に収められた。

（4） このチャップブックのテキストは「にわとり」までの10連バージョンである。

（5） ジャックを単なる大工として描く場合もある。たとえば今日入手できるものとしては，Diana Mayo, *The House that Jack Built,* Oxford: Barefoot Nooks, 2001や，J. P. Miller, *The House that Jack Built,* New York: A Golden Books, 1982. などがある。

（6） 油断しきった様子で立ち上がっていたねずみの姿(7)と獲物を狙う猫の姿(8)で構成した見開き，ねずみが猫の爪におさえつけられている場面（11）と猫の背後を犬がうかがっている場面（12）で構成した見開きなどにも，同様の含意が読み取れるかもしれない。

（7） ストーリー展開にそぐわない絵の配置は，白黒ページと彩色ページを別印刷して綴じるという当時の印刷製本工程の結果にすぎないという説もあるが（バンクストン 47），完成品と同サイズの白紙本を作ることまでして構成を考えていたコールデコットが，あらかじめ彩色ページと白黒ページの位置を特定していなかったはずがない。時間軸に逆行するような絵の配置は，コールデコットが意図的に行ったものだと考えるほうが妥当であろう。

（8） なるほどたしかに，西洋では石造りの建物に職人が自らの銘や印を刻む風習がみられるが，それはたいてい控えめに行われ，しばしば見えない部分に彫られることを考慮すればこの解釈には割り切れなさが残る。

（9） 決して荒唐無稽な解釈ではない。たとえば，比較の対象として先に挙げたチャップブック（1824）には，“The House that Jack Built” とあわせて，“The History of Jack Jingle” と題した物語が収録されている。良い子のジャックが領主に気に入られて教育を授けてもらい，その勤勉さゆえに信頼を得て馬車と土地まで与えられて家を建てた，という内容のわずか4ページの短い物語だが「これが今日ジャックのたてた家と呼ばれている」という言葉で締め括くくられており，詩の背景説明のような役割を果たしていることがわかる。また19世紀末には，路上でかっぱらいをしていた少年が長じて孤児院を建てるという物語のサブタイトルとしてこの詩が使われている例もある（F. M. S. *Hope On: The House that Jack Built,* Edinburgh: Thomas Nelson and Sons, 1877）。このように，「ジャックがたてた家」の詩句に立身出世の物語を重ねることはしばしば行われてきた。

（10） たとえばバンクストンの解釈は以下の通り。「犬を可愛がっていた娘の悲しみはどれほどであっただろう。しかし，娘には日課である牛の乳しぼりの時間がきている。彼女は泣く泣く犬の埋葬を父親にゆだねて，涙をぬぐいつつ牧場の牛のところへ行く」（51–53）。

（11） たとえば『絵本木馬』第5号（木馬座出版局，1954年8月），7–8。訳者名の記載はなく，粗雑な挿絵がつけられている。

（12） 違いは，第9連「ぼろを着た男を」→「ぼろを着た男と」，第11連「穀物を蒔いた」→「穀物を蒔いてゐる」の2か所のみ。

（13） なお，“man all tattered and torn” が登場する第8連についてはまるごと削除されている。

（14） 全集自体の刊行開始は1964年。「マザー・グース」は『ガリバー旅行記』『ロビンソン・クルーソー』などとともに収められていた。

（15） 谷川訳に和田誠が挿絵をつけた『マザー・グース』も4巻本で出版されている（講談社文庫，1981年；講談社1984–85年）。堀内版と和田版を比較すれば，作品全体の印象に与える絵の影響力がよくわかる。

（16） 堀内の絵は，大人の戯れ歌，労働歌，性的な囃子歌なども混入しているマザー・グースの本質をふまえた解釈ともいえる。

引用文献

Caldecott, Randolph. *The House that Jack Built.* London: Routledge and Sons, 1878.
Halliwell, James Orchard, collected. *The Nursery Rhymes of England.* London: C. Richards, 1842.
Mother Goose's Nursery Rhymes. London: Routledge and Sons, 1877.
Opie, Iona & Peter, ed. *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes.* Oxford: OUP, 1951.
————ed. *The Oxford Nursery Rhyme Book.* Oxford: OUP, 1955.
The House that Jack Built. Edinburgh: James Clarke and Co, 1824.
"The House that Jack Built"『The Book of Nursery Rhymes（ナースリィ・ライム・ブック）』, Iona & Peter Opie, gathered, 吉田新一注釈，東京：弓書房，1978 年，7–9。
カーペンター，ハンフリー & マリ・プリチャード『オックスフォード世界児童文学事典』，神宮輝夫監訳，東京：原書房，1997 年
「これはジャックが建てた家よ」『マザー・グースの絵本Ⅲ』, 岸田理生訳，ケイト・グリーナウェイ絵，東京，新書館，1976 年，120–25。
「これはジャックのたてた　いえ」『マザー・グースのうた①』，谷川俊太郎訳，堀内誠一絵，東京：草思社，1975 年，46–51。
「これはジャックの建てた家」『マザー・グース』，寺山修司訳，アーサー・ラッカム絵，東京：新書館，1984 年，47–51。
「ジャックのお家」『マザアグウス　子供の唄』，松原至大訳，東京：春秋社，1925 年，270–81。
「ジャックのたてたいへ」『がてうのかあさん　マザーグース』，児童文化振興協会著，東京：啓文館，1948 年，89–96。
「ジャックの建てたお家」『世界童謡集』，西條八十・水谷まさる訳，初山茂・武井武雄・角田次郎・岡本帰一画，東京：冨山房，1924 年，441–45。
「ジャックの造った家」『世界童話大系　第 17 巻（世界童謡集　上）』，竹友藻風訳，東京：世界童話大系刊行会，1925 年，152–59。
「ジャックの造った家」『Nursery Rhymes（英国童謡集）』，竹友藻風訳註，東京：研究社，1929 年，134–41。
「ジャックのつくった家」内野富男訳，『少年少女世界の名作文学／第 3 巻／イギリス編 I』，東京，小学館，1967 年，291–94。
センダック，モーリス『センダックの絵本論』，脇明子・島多代訳，東京：岩波書店，1990 年
バンクストン，ジョン『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品』，吉田新一訳，東京：絵本の家，2006 年
夏目康子『マザーグースと絵本の世界』，東京：岩崎芸術社，1999 年
吉田新一『絵本／物語るイラストレーション』，東京：日本エディタースクール出版部，1999 年

（提出日　平成 26 年 9 月 24 日）